

ベルギーの言語事情 — 二つの家族から見た現状 —

石 井 誠

The paper is inspired by my 11 months stay in Ghent, a historical city located in the northwest of Belgium. Belgium is a multilingual society with three official languages, Dutch, French, and German. Language use in Belgium has always been a complex and conflicting issue in the nation's history. In the first part of the paper, I will provide a brief review of the socio-political system and language use in Belgium. In the second part of the paper, based on my narrative interview data, I will describe the actual language practice in two Belgium families, one in the Wallonia French speaking region and the other in the Flanders Dutch speaking region.

キーワード：ベルギー 多言語社会 移民受け入れ 言語戦争 アイデンティティー

1 はじめに

筆者は2015年5月から2016年3月まで訪問研究者としてベルギーのアントワープに滞在する機会が与えられた。これを利用してヨーロッパの縮図と言われるベルギーの生活に触れ、アントワープの言語生活の実態を調査してみようと試みたのが本稿の目的である。

ベルギーはオランダ、ドイツ、フランスというヨーロッパの大国に挟まれた位置にあり、歴史上多くの戦争に巻き込まれてきた。そのため、それら大国の影響を大きく受け、政治状況、教育制度も複雑になっている。本稿ではまずベルギーの歴史的背景をもとに現地の言語使用状況を概観し、実際の言語使用者に焦点をあてインタビューにより実態を探ろうと試みた結果をまとめる。

2 ベルギーの言語状況概観

ローマ帝国が勢力を拡大して北上し、現在のベルギーの国土の半分ほどを占領したというのが記録に残るベルギーの歴史の始まりだということだ。そしてそれによりベルギー北部がゲルマン系文化圏、ベルギー南部がラテン系文化圏という現在の区分が形作られることになったそうだ。その後、宗教改革のときに現在のオランダの領域がプロテスタントに、ベルギーの領域がカトリックにとどまったというのもその後の歴史上、大きな転機になったということである。

言語分布から見るとベルギーは住民の使用言語により北側と南側に大きく分けることができる。北側はゲルマン系のオランダ語使用地域、南側はラテン系のフランス語使用

地域となっている。そしてその中間にあるブリュッセル首都地域はフランス語とオランダ語使用が混在する地域となっている。

図1 ベルギーの言語分布 Willemyns (2013) pp.21より



《表示の翻訳》

"Nederlands" = Dutch (オランダ語地域); "Frans" = French (フランス語地域); "Duits" = German (ドイツ語地域);

"Tweetalig (Nederlands-Frans) = Bilingual (Dutch-French) (オランダ語とフランス語2言語地域);

"Nederlands met faciliteitenregime" = Dutch with linguistic 'facilities' for French speakers (フランス語話者のための設備を備えたオランダ語地域);

"Frans met faciliteitenregime" = French with linguistic 'facilities' for Dutch speakers (オランダ語話者のための設備を備えたフランス語地域);

ベルギーの公用語はオランダ語, フランス語, ドイツ語の3言語で, それぞれの言語話者が地域ごとに別れて暮らしている状況である。複数の言語を使用する人が多いのは事実だが, すべてのベルギー国民がバイリンガルだとか, 多言語話者であるわけではない。同じベルギー国民で言葉が通じないということもある。ただブリュッセルはフランス語話者とオランダ語話者が混在しており, 双方の言語を理解する人の割合が高いとのことである。これら地域の区分について福島 (2010) に以下のように紹介されている。

オランダ語が話される北部はオランダ語読みで「ヴラーンデレン」(Vlaanderen) または「ヴラームス地域」(Vlaamse Gewest) と呼ばれる。日本で『フランダーズの犬』でお馴染みの「フランダーズ」(Flanders) は「ヴラーンデレン」の英語読み、織物や絵画で知られる「フランドル」(Flandre) はフランス語読みである。「ヴラームス」は北部に暮らすオランダ語系住民の民族・文化を指す。主にフランス語が話される南部はフランス語読みで「ワロニー」(Wallonie) または「ワロン地域」(Région Wallonne) と呼ばれ、ヴラーンデレンの中に島のように存在するのが「ブリュッセル」(Région bruxelloise/Brusselse Gewest) である。(pp.11-12)

本稿では日本人にも馴染みのあるフランダーズという用語を使うことにする。後半で Gent 住民へのインタビューを記載するが、インタビューを英語で行ったこともあり、フランダーズ、ワローニアという英語の用語に統一することとする。

また、ベルギー北部で話されている言語がオランダ語であると述べたが、厳密に言うとオランダで話されているオランダ語とこの地方で話されている言語には多少の違いがある。そのためこの地方の言語を「フレミッシュ」と呼ぶ場合もあるが、現在北部ベルギーの言語も正式にオランダ語(オランダ語で Nederlands) と呼ばれており、本稿でもオランダ語と称する。なお、オランダで話されているオランダ語とベルギーで話されているオランダ語の関係はイギリス英語とアメリカ英語の関係に近いということだ。また、ベルギーは、国土は小さいが地域ごとに言語が微妙に異なり、方言の違いが大きいということである。

3 ベルギーの社会制度

ベルギーでは何度か憲法が改正されており、その度に地方への権限移譲が行われてきた。1993年に改正された現行の憲法でベルギーは連邦制立憲君主国家に完全に移行している。小島(2010)によると

新しいベルギー国憲法は第一条で「ベルギーは、共同体と地域圏から成る連邦国家である」と宣言した。この連邦制は、空間的に国内を3つの地域圏(ワロン、フランドレン、ブリュッセル)に分け、さらに文化的にも3つの共同体(フランス語、オランダ語、ドイツ語)に分け、三層から構成される複雑な制度である。(中略)

連邦政府は、外交、軍事・防衛、社会保障政策などを管轄する。共同体政府は、文化、教育、家族に関する政策を行い、地域圏政府は住宅、環境、都市計画などを行う。(pp.100)

とまとめられている。義務教育から大学での高等教育を含め、教育関連業務は共同体政

教育は、義務教育の開始と終了の設定、卒業証書授与の最低条件、年金の管理を除けば、フランドル地域においては排他的にフランドル共同体、フランス語地域においては排他的にフランス語共同体が決定を下し、実施することが原則である。(中略) 連邦政府は上にあげた3つの案件を除けば、教育政策にかかわることはない。(pp.139)

図3 フランダースの教育制度 Van Praag, Stevens et al (2014) pp.107より

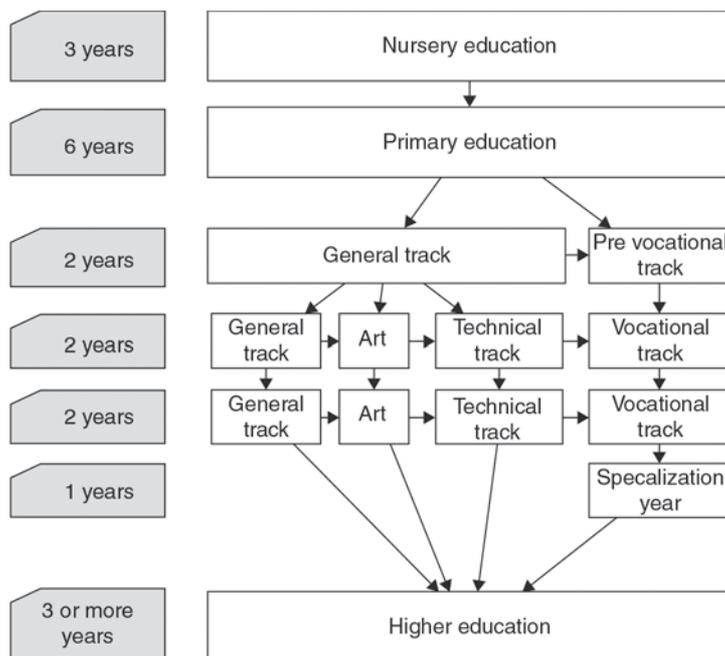


図3は最新のフランダーズの教育制度をまとめたもので、この図では上から下に向かい学年が進むにつれて進路が別れていく構成になっていることが理解できる。Higher education となっているところが大学教育に当たるが、学士課程が3年、さらに修士課程、博士課程が続くので3年以上と記載されている。

3.2 ルーヴェン大学の状況

ベルギーの複雑な言語状況を象徴する事件としてよく紹介されるのがルーヴェン大学分裂事件である。ルーヴェンはブリュッセルの東約30kmのところにある中世の雰囲気を残した街である。この地域はオランダ語が使用されるフランダーズ地域である。ルーヴェンの人口が約9万人であるのに対し、ルーヴェン大学の学生数が4万人という数字であることを考えるとこの街が典型的な学園都市であることが想像できる。²⁾

ルーヴェン大学は正式にはルーヴェン・カトリック大学 (Katholieke Universiteit Leuven : KUL) といい、その名が示すようにカトリック系の大学で600年近くの歴史を持つ名門大学である。ヨーロッパの歴史ある大学同様古くはラテン語により講義をして

いたが、その後ベルギーの上流階級の言語であるフランス語で教育が行われるようになり、さらに民族運動の高まりとともにオランダ語でも授業が行われるようになるという歴史の流れを受けてきた。小島（2010）には次のような記載がある。^{3）}

ルーヴァン・カトリック大学（以下ルーヴァン大学とする）における言語使用をめぐる問題が、大きな政治問題に発展した。ルーヴァンはフランデレンにある大学都市であるが、ルーヴァン大学での教育は元来フランス語で行われていた。しかし、第一次大戦後、オランダ語でも教育が行われるようになり、1946年に大学は両言語部門に分かれた。さらに、1962年には事務組織も分割され、両言語部門では各々独立した運営がなされていた。（中略）

1960年代後半になるとフランデレン側からフランス語部門のワロン地域への移転を要求する声が高まり、ルーヴァン大学は言語対立の焦点となった。（中略）

この問題は、ルーヴァン大学フランス語部門がブラバント州南部のワロン地域に新大学町ルーヴァン・ラ・ヌーヴ (Louvain-la-Neuve) を作り移転することで決着した。（pp.92）

ルーヴェン・カトリック大学から分かれた新大学は現在、正式にはルーヴァン・カトリック大学 (Université catholique de Louvain : UCL) と呼ばれており、別組織の大学となっている。大学がある街ルーヴァン・ラ・ヌーヴ (Louvain-la-Neuve) はルーヴェンから南に30kmほど行ったところにある街だが、途中東西を走っている言語境界線を越えるため、こちらはフランス語圏となっている。歴史の流れから見るとフランス語圏の学園都市にふさわしい土地を見つけ、新たな学園都市を作ったということになる。一つの大学の言語をめぐる問題を解決するために国家プロジェクトとして新学園都市を建設したと言える。現状がどうなっているのかということに興味を覚え、実際に二つの街を視察した。

まずオランダ語で授業を行っているルーヴェン大学だが、ルーヴェンの街の中に600年の歴史を感じさせる大学の建物が点在している。写真1は街の中心部にある大学図書館だが広大な広場に面して堂々と建っている姿に風格を感じる。



写真1 ルーヴェン大学図書館外観 (2016年2月28日撮影) ⁴⁾



写真2 ルーヴェン大学図書館内部 (2016年2月28日撮影) ⁵⁾

オランダ語圏のルーヴェンをあとにし、フランス語圏のルーヴァン・ラ・ヌーヴ（新ルーヴェン）へと向かう。距離は30kmということだがルーヴェンからルーヴァン・ラ・ヌーヴに向かう列車は各駅停車のローカル線で、途中乗り換えも必要のため想像以上に距離を感じる。列車内部の表示や車内アナウンスが途中でオランダ語からフランス語に変わるのが興味深い。

写真3はフランス語の大学ルーヴァン・カトリック大学（Université catholique de Louvain : UCL）の事務棟および学長室がある建物である。この建物はルーヴァン・ラ・ヌーヴ（Louvain-la-Neuve）駅の真上に建っており、大学と街の建設が同時に進められたことがよくわかる。また、大学ができて40年あまりということで比較的新しい建物が多く、ルーヴェンのように歴史を感じさせる建物は駅周辺に見あたらなかった。視察した日は日曜日で大学では授業のない日だったが、通りを歩いている人は皆フランスを話しており、オランダ語を耳にすることはなかった。



写真3 ルーヴァン・カトリック大学事務棟（2016年2月28日撮影）



写真4 ルーヴァン・カトリック大学図書館（2016年2月28日撮影）

3.3 ゲント市の言語をめぐる状況

ゲントはベルギーの首都ブリュッセルの北西約60kmのところにある。ブリュッセル、アントワープに次ぐベルギー第3の都市である。ベルギー全体の人口が約1,100万人、ブリュッセルは約100万人である。ゲントの人口は約25万人で、そのうち6万人あまりが学生ということだ。⁶⁾

ゲントもベルギーの他の街と同様、市内にトルコ系の移民が集住する地域があったり、大きな大学があるため留学生、研究者の割合が高かったりと国際色の豊かな都市である。移民受け入れや言語教育にも力を入れており、移民に対しては移民統合プログラム（Integration program）が無料で受けられるようになっている。オランダ語教育は Huis van het Nederlands（House of Dutch）という組織で受けることができ、たとえベルギー人であってもフランス語圏から来たオランダ語が理解できない人も受講できるようになっている。フランダースで就職するためにはオランダ語が必須で、オランダ語が母語でない人は履修証明がないと職場に採用されるのが難しい。

市役所の手続きなどに必要な公的文書はすべてオランダ語であるが、窓口では英語で話しかけると英語で対応してもらえる。不動産屋や電気、ガス、インターネットの手続き等も英語で対応してもらえる。印刷物はオランダ語が基本で、薬局で買う薬の説明書などはオランダ語、フランス語、ドイツ語が併記されている。英語の説明はついていな

いことが多いが、インターネットのホームページで検索し、英語に機械翻訳すると大意がつかめるので、オランダ語がわからなくても最低限の生活は可能だ。

3.4 ゲント大学

ゲント大学は2017年に創立200年を迎えるフランダース地域を代表する大学である。アメリカや日本の大学のようにキャンパスに建物が集中している形式ではなく、ヨーロッパの学園都市によくあるような街の中に大学の建物が点在している形式になっている。大学の全体像を見ることは難しく、1年近くゲントに滞在しても大学の規模を実感することはできなかった。



写真5 ゲント大学 Aula Academica (2016年3月15日撮影) ⁷⁾

現在、ゲント大学の学部の授業はオランダ語で、大学院の授業はオランダ語と英語で行われている。この大学でも教育言語の問題は避けて通れない問題となっている。上述の福島(2010)に次のような記載がある。⁸⁾

ベルギー独立前はラテン語、独立後はフランス語で授業を行っていた北部のヘント大学では1923年にオランダ語による授業の履修が義務化され、1930年の言語法でオランダ語が教育言語と規定された。(pp.14)

留学生を受け入れるために英語による授業を拡大したらどうかとか、フランスから優秀な留学生を受け入れるためにフランス語で授業をする可能性を指摘したりする意見もあるようだが、微妙な問題となるため、主流意見とならないようだ。

4 事例研究

以上、ベルギー北部を中心に言語状況を概観してきた。それでは実際にその場で暮らしている人たちは言語に対してどのような感覚を持ち、実際の言語利用がどうなっているのだろうか。アントワープ大学で知り合った人たちの中で、家族内の言語利用が特に興味深いと思われる人物に対して、その言語利用状況についてインタビュー調査を行った。その結果を以下にまとめる。

4.1 大学院卒業生Eの事例

Eはアントワープ大学で大学院を修了した24歳の女性である。彼女に対するインタビューは2015年11月11日（水）午後、筆者の自宅にて行った。彼女の第1言語はフランス語で、家族構成は以下のようになっている。

母親：フランダース（アントワープ）出身。主要言語はオランダ語で英語、フランス語を流暢に話す。フランダースでオランダ語による教育を受ける。同時にフランス語の基礎を学校教育で履修する。軍隊への入隊を機会にブリュッセルへ転居。ブリュッセルでは生活のためフランス語が必要となったため、独学でフランス語を学習する。その後、結婚を機に夫の実家があるワローニア（リエージュ近郊のVielsalmという町）に転居。

父親：ワローニア出身。主要言語はフランス語で、英語とオランダ語も理解可能。その他、ドイツ語の基礎知識もあり、ゆっくり話せば通じる。

兄：ワローニアのドイツ語コミュニティで生まれる。主要言語はフランス語。英語、ドイツ語も少しわかる。オランダ語は単語が少しわかるレベル。

4.1.1 Eの言語獲得の歴史

Eは兄と同様ワローニアのドイツ語コミュニティで生まれる。彼女は生まれてからすぐ母親からオランダ語で話しかけられ、育てられた。これは彼女の2歳上の兄が一切オランダ語を理解せず、母方の親戚とコミュニケーションが取れないのを残念に感じた母親が娘にはオランダ語を理解してもらいたいと感じ、育てようとしたためである。ただし、彼女は2歳の頃感染症にかかり、耳の痛みのためしばらく話をするのができなくなったそうだ。感染症が治り、話せるようになったとき、混乱を避けるためフランス語だけを使ったほうがよいという医者からのアドバイスがあり、その後幼稚園、小学校低学年ではフランス語のみを使って会話をしていたそうである。

その後、小学校3、4年生になり、授業の中でオランダ語、さらにドイツ語を学習する

ようになった。小学校のオランダ語, ドイツ語の授業は選択制で本人の希望により選べるそうである。ベルギーの小学校も日本の小学校と同様, 基本的に一人の先生がすべての科目を教えることになっているそうだが, 語学に関しては語学専門の先生がいて選択科目履修のため集まってきた児童に対して授業をしていたということだった。

彼女の英語に関してのスタンスは非常にユニークである。英語はベルギーでは公用語ではない。しかし, 将来の就職などを考えると国際語としての重要性を痛感しており, 学生時代に学習しようと思っていた。だが中学校, 高校では一貫してオランダ語, ドイツ語を学習していたため, 英語を学習する機会はなかった。英語の学習を始めたのは大学に入学してからということだった。このインタビューは英語で行ったが, 受け答えに不自然なところはなく, イギリス人やアメリカ人と話しているのと同じ感覚で話が進められた。ただ, インタビューのはじめに自己紹介で自分の名前のスペリングを言ってもらったところ, アルファベットのYを「ワイ」でなく「エプシロン」と発音していた。これを不思議に思い質問したところ, 英語の授業では基礎コースを履修しなかったのでオランダ語と混同してしまったということだった。英語のクラスを受講するとき, 彼女の言語経験から基礎レベルは必要ないと判断され, いきなり上級レベルの受講を始めたそうである。アルファベットの発音は習う機会がなかったとのことだった。この辺り, 日本の英語教育に対して示唆に富むエピソードになるのではないと思われる。

英語の学習には力を入れ, カナダを訪れて実践練習をしたりもしているとのことだった。ワーキングホリデーのビザを取り, 長期滞在をしようという計画もあったそうである。

4.1.2 Eのアイデンティティー

さて, 自分自身のアイデンティティーについて自身をフランス語圏出身者と捉えているか, オランダ語圏出身者と捉えているかと聞くと次のように答えてくれた。

I think I'm somewhere in between. I can't say I identify myself as Dutch speaker because my Dutch is not good enough to identify myself. I identify myself as French speaker because it's kind of my mother tongue. And that it shows that I'm someone from French speaking community from Belgium because I'm more than impression in my family. In the context in the situation we are Belgium because we have both parts, so we have Germanic influence and Latin influence, (Dutch and French) , and living near to German community. So also we have this German influence. And I was born in German community. So I'm really Belgium. So when my friends would say joking, "oh, you are from Wallonia." "In fact I'm more like Belgium like you are." I think I really middle of anything. We feel like we are in the middle.

つまり, 自分自身はワローニア生まれで母語はフランス語だが, フランダース出身の母親を持ち, 生まれた場所はドイツ語コミュニティとベルギーのすべての要素を受け

継いでいる。誇りを持ってベルギー出身と答えることができるということのようだ。

彼女のような例はベルギーの中で多いのかと質問すると、彼女のような境遇はかなり稀なケースで、クラスメートの中に彼女のようにフランス語とオランダ語の両方を使い分ける生徒はいなかったと答えてくれた。

4.2 ゲント大学教員Sの事例

次にゲント大学でドイツ語の教員をしている30代前半のベルギー女性Sにインタビューした。彼女へのインタビューは2016年3月3日（木）午前、ゲント大学の彼女のオフィスにて行った。彼女はゲント近郊に生まれ育ったため母語はオランダ語である。彼女の夫はワローニア地域出身で母語はフランス語である。現在二人には4歳の息子と9ヶ月になる娘があり、ゲント市内で暮らしている。彼女の家庭では子どもたちをバイリンガルで育てているということだったので、詳しい話を聞いてみようというインタビューすることにした。

4.2.1 Sの言語背景

まずSの言語背景を聞いてみた。彼女の故郷はゲント市内から15kmほど離れたところにあり、両親ともにフランダースの出身。小学校に上がるまでは主にオランダ語のみの生活だったそうである。ただしテレビの放送では英語の番組は音声は英語でオランダ語の字幕が付いていたようで、自然と英語に接する機会は多かったということだ。フランダースの小学校では5年生から第2言語（L2）の教育が始まるということで、彼女も5年生（10歳）のときにフランス後の履修を始めたということだ。週に4時間の授業で、クラス担任の先生が教え、基礎的な会話をしたり、文法などの説明を受けたりする授業だったようだ。中学生になると英語、さらに高校生ではドイツ語の学習をしたそうだ。英語は週に3時間、ドイツ語は週に2時間だったということだ。この他、教養教育として週に5時間ラテン語の授業もあったということだ。大学での専攻はゲルマン語と文学の研究で主にドイツ語学やドイツ文学を学び、博士号までとったということである。

ベルギー以外で暮らしたところはスイスのバーゼル（ドイツ語圏）でPhDの準備のため1年間、ワシントンDCのジョージタウン大学ドイツ語学部でポストドクターを行った1年間ということだ。

4.2.2 結婚によるSの言語利用状況の変化

夫とはブリュッセルからベルリンに向かう飛行機に乗り合わせたのが知り合うきっかけで、6年前に結婚したということだ。夫はブリュッセル南部のワローニア地域の出身で、フランス語が母語である。両親ともにワローニアの出身だが、夫の母親は幼少期の6年間フランダースに住んでいたということでもかなり自由にオランダ語ができる

そうである。ワローニア地域の人にとってこれは結構珍しいことだそうだ。

出会ったところから結婚当初の夫婦の会話は英語が中心だったようで、以下のように話している。

When I met him, he did not speak Dutch. He spoke English and French. That was his language.

I graduated from high school in 1999. So from 1999 until 2008 I had not spoken French. My French at that time was really far. So we started conversation with English.

Actually we talked about which language we use. And he said that he prefer speaking English for two reasons. The first reason was that he thought it was more fair because he didn't speak any Dutch and he thought English is our neutral language. And other reason was that we thought we are more fluent in English other than we would chosen French because my French is not so fluent any more. We still talk in English.

結婚した当初、夫はオランダ語を全然話せなかったそうだ。S自身は小学校から高校までフランス語を履修したが、高校を卒業してから10年間ほとんど使っていなかったため、かなり忘れてしまっていたそうだ。そこで両者で話し合い、英語を共通言語としようとしたそうである。結婚してアントワープに定住し、夫はオランダ語を履修し、今では日常生活に不自由がないレベルまで使えるようになったそうである。夫は仕事で英語を使う機会が多く、夫婦の会話は今でも英語が多いとのことだ。また、結婚を転機にS自身もフランス語を使う機会が増え、フランス語運用能力を回復しつつあるそうだ。

4.2.3 Sの子どもたちの言語環境

そして最初の子どもが生まれると両親はそれぞれの母語を使って子どもに話しかけたそうである。

We are doing like one parent one language system, but because Dutch is so much more present in Ghent. --- Only he hears French from his father and also we put try to some television as well. He can watch cartoons in French and he sometimes spend whole weekend with father's parents.

So he mixes a lot, but he now starts speaking more French, but Dutch is more fluent. He is proud of speaking French.

オランダ語圏のアントワープで生活しているため、息子は幼稚園に行っている間など家庭を離れると圧倒的にオランダ語利用の機会が多いようだ。フランス語を話すときもオランダ語の単語が混ざり、文法構造もオランダ語的だそうである。また、息子は夫婦の英語

の会話を聞く機会も多いが、英語は理解しているのかとの質問に対しては、理解はしていないと思うが、オランダ語の会話に英語の単語を混ぜたりすることがあるそうだ。

He doesn't understand yet, but some words he already says in English, like "please".

また、テレビで主人公が英語を話すアニメを見るなど、英語に親しむ機会は多いようだ。

息子は他の子に比べ、話し始めるのが遅かったそうだが、現在急速に言語能力を獲得しているようで、いろいろ間違えたりするが積極的に会話しているそうである。未知の言語に対する好奇心も非常に旺盛で母親が複数の言語を話すことを知っており、いろいろ質問してくるそうだ。

娘はまだ、9ヶ月で発話はないが、兄から話しかけられる機会も多く、Sの姉に二人の娘がいて交流する機会も多いので、話し始めるのは兄より早くなるだろうとのことだった。

このようにSの家庭では結婚や転居、子どもの誕生など、人生の転機に応じて構成員の使用言語が変わってきた。今後も子どもの成長に応じて柔軟に対応していくことと思われる。

5 おわりに

ベルギーは国内に3つの言語を使用する人々が共存するという行政の立場からみると非常に困難な状況を抱えて国家の運営を行っている。そこに暮らしている人々も様々な状況のもと多言語環境に適応している。ここに暮らす人々を見ると、言語を生きていくために必要な道具として捉え、積極的に活用していこうという姿勢が感じられる。

日本社会もこれから移民の受け入れなどが考えられ、徐々に多言語環境にさらされることになることが予想される。ベルギー社会の対応は大いに参考になると思われる。

謝辞

本稿執筆にあたりゲント大学文学部言語文化学科主任Andreas Niehaus教授（Prof. dr. Andreas Niehaus, Faculty of Arts and Philosophy - Head of Department of Languages and Cultures）には公私にわたり多大な支援を受けた。また、快くインタビューに応じてくれた両名にも深く感謝の意を表したい。

注

- 1) ベルギーでは2010年6月の総選挙以来1年半近く連邦政府の組閣ができないという状態が続いた。しかし、共同体政府や地域圏政府への大幅な権限移譲が行われていたため、この間社会にそれほど大きな混乱は生じなかったそうである。
- 2) ルーヴェン市の人口はフランダース政府の公式英語ホームページによる。学生数はフランダース政府公式ホームページ上の教育統計年鑑2014-2015（pp.193）による。
- 3) 引用文中ルーヴァンと表記されているのはルーヴェンをフランス語式に発音してい

るためである。オランダ語での表記はLeuvenで発音がルーヴェン、フランス語での表記はLouvainで発音がルーヴァンとなる。このようにベルギーでは一つの地名が言語によって表記、発音が異なることがあり、慣れていない人には混乱を与えることが多い。

- 4) 本稿掲載の写真はすべて筆者が撮影したものである。
- 5) この図書館は一般に公開されており内部を見学することができる。第1次世界大戦で蔵書が焼失するなど大きな被害を受けたようだ。
- 6) 各都市の人口はフランダース政府の公式英語ホームページによる。学生数はフランダース政府公式ホームページ上の教育統計年鑑2014-2015 (pp.193) による。なお、アントワープ大学の学生数は同統計によると3万人余りとなっている。
- 7) アントワープ大学を象徴する建物で、大学の重要な儀式などに利用されている。柱のデザインは大学の公式ロゴとしても使われている。
- 8) 引用文中アントワープ大学と記載されているのはアントワープのオランダ語の発音を利用しているためである。

参考文献

- [1] 川村三喜男 (2009). 「ベルギー・フランドル共同体の外国語教育政策 何がそれに形を与えているか？」『富盛伸夫 (編) 拡大EU諸国における外国語教育政策とその実効性に関する総合的研究 平成18-20年度科学研究費補助金 基盤研究B 研究プロジェクト報告書』 pp.135-156
- [2] 小島健 (2010). 「ベルギー連邦制の背景と課題」『東京経大会誌 (経済学)』第265号, pp.87-106
- [3] 西尾由利子・金田尚子 (2010). 「ベルギー - 3公用語, 言語戦争の国 -」『EUの言語教育政策 日本の外国語教育への示唆』, くろしお出版, pp.25-38
- [4] 福島知枝子 (2010). 「ベルギー: 変容する言語モザイク国家」『世界の言語政策 第3集 - 多言語社会を生きる -』, くろしお出版, pp.9-28
- [5] Van Praag, Lore, Stevens, Peter, Van Houtte, Mieke, Dworkin, Gary (2014). "Belgium (Flanders) " The Palgrave handbook of race and ethnic inequalities in education, Palgrave, pp.106-137
- [6] Willemyns, Roland (2013). Dutch : biography of a language Oxford university press
- [7] フランダース政府公式英語ホームページ (アクセス日2016年3月21日)
<http://www.flanders.be/en>
- [8] フランダース政府公式ホームページ教育統計年鑑2014-2015(アクセス日2016年3月21日)
<http://www.ond.vlaanderen.be/onderwijsstatistieken/2014-2015/statistischjaarboek2014-2015/publicatiestatistischjaarboek2014-2015.htm>